

伯爵の釵

泉鏡花

青空文庫

このもの語の起つた土地は、清きと、美しきと、二筋の大川、
市の両端を流れ、真中央に城の天守なお高く聳え、森黒く、濠蒼
く、国境の山岳は重畳として、湖を包み、海に沿い、橋と、
坂と、辻の柳、蔓の浪の町を抱いた、北陸の都である。

ひととせ
一年、激しい早魃のあつた真夏の事。

……と言うとたちまち、天に可恐しき入道雲湧き、地に水論の
修羅の巷の流れたように聞えるけれど、決して、そんな、物騒な
沙汰ではない。

かかる折から、地方巡業の新劇団、女優を主とした帝都の有名な大一座が、この土地に七日間の興行して、全市の湧くがごとき人氣を博した。

極暑の、ひでり旱というのに、たといいかなる人氣にせよ、湧くの、

煮えるのなどは、口にするも暑くるしい。が、——ことわざ諺に、火事の

折から土蔵の焼けるのを防ぐのに、大おおだらい鹽しほに満々と水を湛え、たた

ろうそく

蠟燭に灯を点じたのをその中に立てて目塗めぬりをすると、壁を透しとお

て煙が裡うちへ漲みなぎつても、火氣を呼ばないで安全だと言う。……火を

もつて火を制するのだそうである。

ここに女優たちの、近代的情熱の燃ゆるがごとき演劇は、あたかもこの轍てつだ、と称となえて可い。雲は焚やけ、草は萎しほみ、水は涸かれ、

人は喘ぐ時、一座の劇はさながら褥熱じよくねつに対する氷のごとく、

十万の市民に、一剤、清涼の気を齎もたらして剰余あまあつた。

膚はだの白さも雪なれば、瞳も露の涼しい中にも、拳こぶつて座中の明

星たと称たえられた村井紫玉しぎよくが、

「まあ……前刻さつきの、あの、小さな児こは？」

公園の茶店に、一人静しずかに憩いながら、緋塩瀬ひしおぜの煙管筒きせるづつの結むすび

目めを解掛けつつ、偶ふと思つた。……

鬚まげも女優巻でなく、わざとつい通りの束髪で、薄化粧の淡洒あつさり

した意気造いきづくり。形容しなに合せて、煙草入たばこいれも、好みで持った氣組の

婀娜あだ。

で、見た処は芸妓げいしやの内証ないしよ歩行あるきという風だから、まして女優

の、忍びの出、と言つても可い風采。

また實際、紫玉はこの日は忍びであつた。演劇は昨日樂になつて、座の中には、直ぐに次興行の隣国へ、早く先乗をしたのが多い。が、地方としては、これまで経歴つたそこかしこより、觀光に価値する名所が夥い、と聞いて、中二日ばかりの休暇を、紫玉はこの土地に居残つた。そして、旅館に二人附添つた、玉野、玉江という女弟子も連れなくて、一人で密と、……日盛もこうした身には苦にならず、町中を見つつ漫に來た。

惟うに、太平の世の国の守が、隠れて民間に微行するのは、政を聞く時より、どんなにか得意であらう。落人のそれならで、そよと鳴る風鈴も、人は昼寝の夢にさえ、我名を呼んで、讚美し、

歎賞する、微妙なる音響、と聞えて、その都度、ハツと隠れ忍んで、ほほえ微笑み微笑み通ると思え。

ふかばり深張の涼傘の影ながら、なお面影は透き、色香は仄めく……

心地すれば、たねばか誰憚るともなく自然から俯目に俯向く。謙讓の棲は

ずれば、きよごう倨傲の襟より品を備えて、尋常な姿容は調つて、

焼地に焦りつく影も、水で描いたように涼しくも清爽であつた。

わずかに畳の縁ばかりの、日影を選んで辿るのも、人は目を睜

つて、鯨に乗つて人魚が通ると見たであらう。……素足の白いの

が、すらすらと黒縹子の上をにれば、溝の流も清水の音信。

で、まつさき真先に志したのは、城の櫓と境を接した、三つ二つ、全

国に指を屈するという、景勝の公園であつた。

二

公園の入口に、樹林を背戸に、蓮池はすいけを庭に、柳、藤、桜、山吹など、飛々とびとびに名に呼ばれた茶店がある。

紫玉が、いま腰を掛けたのは柳の茶屋というのであつた。が、
紅い襷あかたすきで、色白な娘が運んだ、煎茶せんちやと煙草盆たばこぼんを袖に控えて、
さまで嗜むたしなともない、その、伊達だてに持った煙草入を手にした時、

「……あれは女の児こだったかしら、それとも男の児こだったろうかね。」

———と思ひ出したのはそれである。———

で、華奢造りの黄金煙管で、余り馴れない、ちと覚束ない

手つきして、青磁色の手つきの瀬戸火鉢を探りながら、

「……帽子を……被^{かぶ}っていたとすれば、男の児だろうが、青い鉢

巻だつけ。……麦藁^{むぎわら}に巻いた切^きだつたろうか、それともリボン

かしら。色は判然^{はつきり}覚えているけど、……お待ちよ、———とこ

だから。……」

取つて着けたような喫^のみ方だから、見ると、もののしいまで

に、打傾いて一口吸つて、

「……年^{とし}紀は、そうさね、七歳^{ななつ}か六歳^{むっつ}ぐらいな、色の白い上品な、

……男の児にしてはちと綺麗過ぎるから女の児———だとりボンだ

ね。――青いリボン。……幼稚^{ちいさ}くたつて緋^ひと限りもしないわね。

では、やっぱり女の児かしら。それにしても麦藁帽子……もつともおさげに結つてれば……だけど、そこまでは気が付かない。……

……

大通りは一筋だが、道に迷うのも一興で、そこともなく、裏小

路へ紛れ込んで、低い土塀^{うり}から瓜^{なす}、茄子^{はたけ}の畠^{のぞ}の覗かれる、荒れ寂

れた邸^{やしき}町^{まち}を一人で通つて、まるつきり人^{ゆきあ}に行合^あわず。白熱し

た日^ひ盛^{ざかり}に、よくも羽が焦げないと思う、白い蝶々の、不意にス

ツと来て、翻^{ひらひら}々と擦^{すり}違^{ちが}うのを、吃^{びつくり}驚^{おどろ}した顔をして見送^{みおく}つて、

そして莞^{にっこり}爾^に……したり……そうした時は象牙^{ぞうげ}骨^{ぼね}の扇^{あふ}でちよつ

と招^{まね}いてみたり。……土塀^{くずれやね}の崩^{くずれ}屋根^{やね}を仰^{あが}いで血のような百^{さるすべ}日^ひ

紅の咲満ちた枝を、涼傘ひがさの尖さきで擦くすぐる、と堪たまらない。とぶるぶるゆさゆさで行やるのに、「御免なさい。」と言つてみたり。石垣の草くさいきれ蒸なに、棄ててある瓜の皮が、化けて脚が生えて、むくむくと動出しそうなのに、「あれ。」と飛退とびのいたり。取留めのないすさびも、この女の人氣なれば、話せば逸話に伝えられよう。

低い山かと思つた、樹立こたちの繁つた高い公園の下へ出ると、坂の上り口やしろに社があつた。

宮も大きく、境内も広がつた。が、砂浜に鳥居を立てたよう、拝殿うらがけの裏うつつ崖うつつには鬱々たるその公園の森を負いながら、広前ひろまえは一面、真空まそらなる太陽に、礫こいしの影一つなく、ただ白紙しろかみを敷詰めありさまた光景ひざしなのが、日射ひざしに、やや黄きばんで、渺びようとして、どこから散つ

たか、百日紅の二三点。

……覗くと、静まり返った正面の階の傍に、紅の手綱、朱の鞍くら置いた、つくりものの白の神馬しんめが寂寞せきばくとして一頭立ひとつつ。横に公園へ上る坂は、見透みとおしになつていたから、涼傘のままスツと鳥居から抜けると、紫玉の姿は色のまま鳥居の柱に映つて通る。……そこに屋根囲やねがこいした、大なる石の御手洗みたらしがあつて、青き竜頭りゆうづから湛たたえた水は、且つすらすらと玉を乱して、颯さつと簾すだれに噴溢ふきあふれる。その手水鉢ちようずばちの周圍まわりに、ただ一人……その稚児ちちはが居たのであつた。が、炎天、人影も絶えた折から、父母の昼寝の夢を拔出した、神官の児こであろうと紫玉は視みた。ちらちら廻りつつ、廻りつつ、あちこちする。……

と、御手洗は高く、稚児は小さいので、下を伝うてまわりを廻るのが、さながら、石に刻んだ形が、噴溢れる水の影に誘われて、すらすらと動くような。……と視るうちに、稚児は伸上り、伸上つては、いたいけな手を空に、すらりと動いて、伸上つては、また空に手を伸ばす。――

紫玉はズツと寄った。稚児はもう涼傘の陰に入つたのである。

「ちよつと……何をしているの。」

「水が欲しいの。」

と、あどけなく言つた。

ああ、それがため足場を取つては、取替えては、手を伸ばす、が爪立つても、青い巾きれを巻いた、その振分髪、まろが丈は……筒つつ

井筒ついづつその半なかばにも届くまい。

三

その御手洗の高い縁に乗っている柄杓ひしやくを、取りたい、とまた稚児がそう言った。

紫玉は思わず微笑ほほえんで、
「あら、こうすれば仔細わけないよ。」

と、半身を斜めにして、溢れかかる水の一筋を、玉の雫しずくに、颯さつと散らして、赤く燃ゆるような唇うに請けた。ちようど渴かわいてもいたし、水の潔きよい事を見たのは言うまでもない。

「ねえ、お前。」

稚児が仰いで、熟と紫玉を視て、

「手を淨める水だもの。」

直接に吻を接するのは不作法だ、と咎めたように聞えたのである。

劇壇の女王は、氣色した。

「いやにお茶がつてるよ、生意氣な。」と、軽くその頭を掌で叩き放しに、衝と広前を切れて、坂に出て、見返りもしないで、さてやがてこの茶屋に憩ったのであった。――

今思うと、手を触れた稚児の頭も、女か、男か、不思議にその感覚が残らぬ。氣は涼しかったが、暑さに、いくらか茫としたものかも知れない。

「娘さん^{ねえ}、町から、この坂を上る処に、お宮がありますわね。」

「はい。」

「何と言う、お社です。」

「浦安神社でございますわ。」と、片手を疊に、娘は行儀正しく答えた。

「何神様が祭つてあります。」

「お父さん、お父さん。」と娘が、つい傍^{そば}に、蓮池^{はすいけ}に向いて、

(じんべ)という膝^{ひざ}ぎりの帷子^{かたびら}で、眼鏡の下に内職らしい網を

すいている半白の父を呼ぶと、急いで眼鏡を外して、コツンと水牛の柄を疊んで、台に乗せて、それから向直つて、丁寧^{ていねい}に辞儀をして、

「ええ、浦安様は、浦安かれとの、その御守護じゃそうにござりまして。水をばお司りなされます、竜神と申すことでござります。

これの、太夫様にお茶を替えて上げぬかい。」

紫玉は我知らず衣紋えもんが締しまった。……称となえかたは相応そぐわぬにもせ

よ、拙へたな山水画なの裡なかの隠者めいた老人までが、確か自分を知っている。

心着けば、正面神棚の下には、我が姿、昨夜ゆうべも扮ふんした、劇中女ヒロイン主人公の王妃なる、玉の鳳凰ほうおうのごときが掲げてあつた。

「そして、……」

声も朗かに、且つ慎ましく、

「竜神だと、女おんながみ神ですか、男おとこがみ神ですか。」

「さ、さ。」と老人は膝を刻んで、あたかもこの間を待構えたように、

「その儀は、とかくに申しまするが、いかがか、いずれとも相分りませぬ。この公園のずつと奥に、真暗な巖窟の中に、一ヶ処清水の湧く井戸がござります。古色の夥しい青銅の竜が蟠つて、井桁に蓋をしておりまして、金網を張り、みだりに近づいてはなりませぬが、靈沢金水と申して、これがためにこの市の名が起りましたと申します。これが奥の院と申す事で、ええ、貴方様が御意の浦安神社は、その前殿と申す事でござります。御参詣を遊ばしましたか。」

「あ、いいえ。」と言ったが、すぐまた稚児の事が胸に浮んだ。

それなり一時言葉が途絶える。

森々たる日中の樹林、濃く黒く森に包まれて城の天守は前に

聳ゆる。茶店の横にも、見上るばかりの槐榎の暗い影が樅楓を薄

く交えて、藍緑の流に群青の瀬のあるごとき、たらたら

上りの径がある。滝かと思う蟬時雨。光る雨、輝く木の葉、こ

の炎天の下蔭は、あたかも稲妻に籠る穴に似て、もの凄いまで寂

寞した。

木下闇、その横径の中途に、空屋かと思う、廂の朽ちた、

誰も居ない店がある……

四

鎖とぎしてはないものの、奥に人が居て住むかさえ疑わしい。それ

とも日が暮れると、白い首でも出てちとは客が寄ろうも知れぬ。

店一杯に雛壇ひなだんのような台を置いて、いとど薄暗いののに、三方を

黒布で張廻した、壇つけもとの附元ながればしに、流星しやれこうべの髑髏ひからどりむし、乾びた蛾

に似たものを、点々並べたのは的まとである。地方の盛場には時々見

掛ける、吹矢の機関からくりとは一目視みて紫玉にも分つた。

実は——吹矢も、化ものと名のついたので、幽霊の廂合ひあわいの幕

から倒さかさまにぶら下がり、見越入道みこしにゆうどうは詠あつらえた穴からヌツと出る。

雪女こしらは拵うつつえの黒堀うづめどりに薄り立ち、産女鳥うぶめどりは石地藏と並んでしよん

ぼりたたずイむ。一ツ目小僧の豆腐買は、流灌ながれかんちよう頂へりの野川の縁を、

おおがき 大笠を俯向^{うつむ}けて、跣足^{はだし}でちよこちよこと巧みに歩^{ある}行^くなど、仕
 掛ものになつてゐる。……いかがわしいが、生^{いきりよう}霊^{りよう}と札の立つ
 た就^{なかんずく}中^な小さな的に吹当^ふてると、床板^{ひふんどし}ががらりと転^{ひつくりかえ}覆^つつて、
 おおまつたけ 大松茸^{ひふんどし}を抱^かいた緋^ひの褌^{ふんどし}のおかめが、とんぼ返^{ひつぽ}りをして莞爾^{にっこり}と
 飛出^ひす、途端^{ひつぽ}に、四方^{ひつぽ}へ引張^ひつた綱^ひが揺^ゆれて、鐘^{かね}と太鼓^{たいこ}がしだら
 でんで一^{いち}斉^{じき}にがんがらん、どんどと鳴^なつて、それで市^{いち}が榮^{さか}えた、
 店^{みせ}なのであるが、一^{いち}ツ目小僧^{こぞう}のつたい歩^{ある}行^く波^{なみ}張^{はり}が切^き々^{ぎれ}に、
 藪^{やぶ} 藪^{やぶ}は打^ぶ倒^{たお}れ、飾^{かざり}の石地蔵^{いしじぞう}は仰^{あや}向^むけに反^さつて、視^みた処^{ところ}、も
 のあわれなまで寂^{さび}れていた。

——その軒^{のき}の土間^{うしろ}に、背後^{しやが}むきに蹲^{そうぎよう}んだ僧^{そうぎよう}形^{がた}のものがあ^ある。
 坊主^{ぼくし}であらう。墨染^{こくも}の麻^あの法衣^{ほふえ}の破^やれ破^やれな形^{がた}で、鬱^{うこん}金^{こん}ももう鼠^{ねず}

に汚れた布に——すぐ、分つたが、——三味線を一挺、盲目の琵琶わじよい背負しよに背負しよっている、漂泊さすらう門附かどづけの類たぐいであろう。

何をか働く。人目を避けて、蹲うずくまつて、虱しらみを捻ひねるか、瘡かさを搔かくか、弁当を使うとも、掃溜はきだめを探した干魚ほしうおの骨を舐しゃぶるに過ぎまい。

乞食のように薄汚い。

紫玉は敗竄はいざんした芸人と、荒涼たる見世ものに対して、深い歎た

息めいきを漏らした。且つあわれみ、且つ可忌いまわしがったのである。

灰吹はいふきに薄い唾つばした。

この世盛りの、思い上れる、美しき女優は、樹の緑蟬ししたたの声も滴たるがごとき影に、框かまちも自然おのずから浮いて高い処に、色も濡々ぬれぬれと水際立あじさいつ、紫陽花あじさいの花の姿を撓たわわに置きつつ、翡翠ひすい、紅玉ルビー、真珠な

ど、指環ゆびわを三つ四つ嵌はめた白い指をツト挙げて、鬢びんの後毛おくれげを搔いたついでに、白金プラチナの高彫たかぼりの、翼ダイヤに金剛石ちりばを鏤め、目には血スルウドストンくちばし、嘴くちばしと爪エメラルドに緑宝玉エメラルドの象嵌ぞうがんした、白く輝く鸚鵡おうむの釵かんざし――
 何某なにがしの伯爵が心を籠めた贈物おくりのとて、人は知つて、（伯爵）と称となうるその釵かんざしを抜いて、脚を返して、喫掛のみかけた火皿やにの脂さらを浚つた。……伊達だての煙管きせるは、煙を吸うより、手すさみの科しぐさが多い慣習なraiである。

三味線背負ひつかった乞食坊主が、引搔ひつかくようにもぞもぞと肩ゆすを揺ると、一眼ひとみひたと盲めついた、眇めつの青ぶくれの面かおを向けて、こう、引ひつか傾たがつて、熟じつと紫玉むらさきのその状さまを視ると、肩かたを抽ぬいた杖つえの尖さきが、一度胸むねへ引込ひっこんで、前屈まえかがみに、よたりと立つた。

杖を徑に突立て突立て、辿々しく下闇を蠢いて下りて、城の方へ去るかと思えば、のろく後退をしながら、茶店に向つて、吻と、立直つて一息吐く。

紫玉の眉の顰む時、五間ばかり軒を離れた、そこで早や、此方へぐつたりと叩頭をする。

知らない振して、目をそらして、紫玉が釵に俯向いた。が、濃い睫毛の重くなるまで、坊主の影は近いたのである。

「太夫様。」

ハツと顔を上げると、坊主は既に敷居を越えて、目前の土間に、両膝を折っていた。

「……………」

「お願でござります。……お慈悲じゃ、お慈悲、お慈悲。」
 仮かり初そめに置いた涼傘ひがさが、檻ぼろ樓ごろも法衣ほろの袖そでに触れそうなので、密そつと
 手元へ引いて、

「何ですか。」と、坊主は視ないで、茶屋の父娘おやこに目を遣やつた。
 立つて声を掛けて追おうともせず、父も娘も静しずかに視ている。

五

しばらくすると、この旱ひでりに水は涸かれたが、碧へき緑りよくの葉はの深ふかく
 繁はれる中なる、緋もみじ葉はの滝たきと云うのに対して、紫玉はすいけは蓮みぎわ池いけの汀みぎわを
 歩ある行あるいていた。ここに別に滝たきの四阿あずまやと称なづうるのがあつて、八ツ

橋を掛け、飛石を置いて、枝折戸しおりどを鎖とぎさぬのである。

で、滝のある位置は、柳の茶屋からだど、もとの道へ小戻りする事になる。紫玉はあの、吹矢の径みちから公園へ入らないで、引返したので、……涼傘を投遣なげやりに翳かざしながら、袖を柔かに、手首をやや硬くして、あすこで抜いた白ブラチナ金の鸚鵡おうむの釵かんざし、その翼をちよつと抓つまんで、きらりとぶら下げているのであるが。

仔細しさいは希有けうな、……

坊主が土下座して「お慈悲、お慈悲。」で、お願いというのが金でも米でもない。施与ほどこしには違いなけれど、変な事には「お禁ましな厭いをして遣わされい。虫歯が疚うずいて堪え難いでな。」と、成程左の頬がぷくりとうだばれたのを、堪難い状さまたけのひらに掌で抱えて、首を

引ひつかたむ 傾かたむ けた同じ方の一眼が白くどろんとして潰つぶれている。その

目からも、ぶよぶよした唇からも、汚しるい液が垂れそうな塩梅あんばい。

「お慈悲じゃ。」と更に拝んで、「手足に五寸釘を打たりようとも、かくまでの苦くるしみ悩なやめはございますまいぞ、お情なさけじゃ、禁厭まじのう

て遣やわされ。」で、禁厭とは別儀でない。——その紫玉が手にし

た白金プラチナの釵かんざしを、齒はのうろへ挿さし入いれて欲しいのだと言う。

「太夫様お手ずから。……竜りゅうと蛭なめくじ蟪かいほど違いまして、生しょうある

うちは私わしじゃとて、芸人の端くれ。太夫様の御光明おひかりに照らされま

すだけでも、この疚痛いたみは忘れましょう。」と、はッはッと息を

吐つく。……

既に、何人なんびとであるかを知られて、土に手をついて太夫様と言

われたのでは、そのいわゆる禁厭の断り悪さは、金錢の無心をされたのと同じ事——但し手から手へ渡すも恐れる……落して釵を貸そうとすると、「ああ、いや、太夫様、お手ずから。……貴女様の膚の移香、脈の響をお釵から伝え受けたいのでござります。貴方様の御血脈、それが禁厭になりますので、お手に釵の鳥をばお持ち遊ばされて、はい、はい、はい。」あん、と口を開いた中へ、紫玉は止む事を得ず、手に持添えつつ、釵の脚を挿入れた。

喘ぐわ、舐るわ！鼻息がむツと掛る。堪らず袖を卷いて唇を蔽いながら、勢い釵とともに、やや白やかな手の伸びるのが、雪せつば白くなる鶯がちよう鳥の七宝の瓔珞ようらくを掛けた風情なのを、無性髯ぶしようひげで、

チュツパと啜すすりこ込むように、坊主は犬蹲いぬつくばいになつて、頤あごでうけて、どろりと嘗なめ込む。

と、紫玉の手には、ずぶずぶと響いて、腐れた瓜を突刺きす気味きみ合あい。

指環は緑紅の結晶したる玉のごとき虹にじである。眩まぶしかったろう。坊主は開いた目も閉じて、ぼうとした顔がん色しよくで、しつきりもなしに、だらだらと涎よだれを垂らす。「ああ、手がだるい、まだ？」「いま一息。」――

不思議な光景ようすは、美しき女が、針の尖さきで怪しき魔を操る、舞台における、神秘なる場面にも見えた。茶店の娘とその父は、感に堪えた観客かんかくのごとく、呼吸いきを殺して固唾かたずを飲んだ。

……「ああ、お有難や、お有難い。トンと苦悩を忘れました。

お有難い。」と三味線包、がつくりと抜衣紋ぬきえもん。で、両掌りょうてを仰

向け、低く紫玉の雪の爪つまさき先を頂く真似して、「かように穢むさいも

のなれば、くどくどお礼など申して、お身近はかえってお目触めざわり、

御恩は忘れぬぞや。」と胸を捻ねじるように杖で立つて、

「お有難や、有難や。ああ、苦を忘れて腑ふが抜けた。もし、太夫

様。」と敷居を跨またいで、蹠踉よろけさま状に振向いて、「あの、そのお釵に

……」——「え。」と紫玉が鸚鵡みを視る時、「齒くさが着いては

おりませぬか。恐縮おそれや。……えひひ。」とニヤリとして、

「ちやつとお拭ふきなされませい。」これがために、紫玉は手を掛

けた懷紙ふところがみを、余儀なくちよつと逡巡ためらった。

同時に、あらぬ方かたに蒼つと面おもてを背けた。

六

紫玉は待兼ねたように懷紙かいしを重ねて、伯爵、を清めながら、森の径こみちへ行きましたか、坊主は、と訊きいた。父も娘も、へい、と言つて、大方そうだろうと言ふ。——もう影もなかったのである。父娘おやこはただ、紫玉の挙動ふるまいにのみ氣を奪とられていたろう。……この辺あを歩行く門附みたいなもの、とまた訊けば、父親がついぞ見掛けた事はない。娘が跣足はだしでいました、と言つたので、旅から紛込んだものか、それも分らぬ。

と、言ううちにも、紫玉はちよいちよい眉を顰ひそめた。抜いて持った釵、鬢かんざし摺れに髪に返そうとすると、や、するごとに、手の撓しなうにさえ、得も言われない、異な、変な、悪臭い、堪たまらない、臭におい気がしたのであるから。

城は公園を出る方で、そこにも影がないとすると、吹矢の道を上つたに相違ない。で、後へ続くには堪えられぬ。

そこで滝の道を訊きいて——ここへ来た。——

泉せん殿でんに擬なぞえた、飛とび々とびの亭ちんのいずれかに、邯鄲かんたんの石の手ちようずばち鉢、名品、と教えられたが、水の音より蟬の声。で、勝手に

通抜けの出来る茶屋は、昼寝の半ばらしい。どの座敷も寂寞ひっそりしてひとけはい人氣勢もなかった。

御齒黒蜻蛉が、鉄漿つけた女房の、微な夢の影らしく、ひら
 ひらと一つ、葉ばかりの燕子花を伝つて飛ぶのが、このあたりの
 御殿女中の逍遙した昔の幻を、寂しく描いて、都を出た日、
 遠く来た旅を思わせる。

すべて旧藩侯の庭園だ、と言うにつけても、贈主なる貴公
 子の面影さえ浮ぶ、伯爵の鸚鵡を何としよう。

霊廟の土の瘡を落し、秘符の威徳の鬼を追うよう、たちど
 ころに坊主の虫歯を癒したはさることながら、路々も悪臭さ
 の消えないばかりか、口中の臭気は、次第に持つ手を伝つて、袖
 にも移りそうに思われる。

紫玉は、樹の下に涼傘を畳んで、滝を斜めに視つつ、池の縁に

低くいた。

滝は、ひでり早にしかく骨なりといえども、

巖にはいわお苔蒸し、壺は森を

被いであお蒼い。

しかも巖がくれの裏に、

どうどうと落ちたぎる水の

音のすさま凄じく響くのは、

大樋をおおどい伏せて二重に城の用水を引いた、

敵に対する要害で、地下を城の内濠に

うちぼり灌ぐと聞く、戦国の余残

なごり

だそうである。

紫玉は釵を洗った。……えん艶なる女優の心を得た池の面は、

萌黄

もえぎ

の薄絹のごとく波を伸べつつ拭ぬぐって、清めるばかりに見えたのに、

取って黒髪に挿そうとすると、ちつと離れたくらいでは、耳の辺

はた

へも寄せられぬ。鼻を衝ついて、ツンと臭い。

「あ、」と声を立てたほどである。

雫しずくを切ると、雫まで芬ぶんと臭におう。たとえば貴重なる香水の薫かおりの一
 滴の散るように、洗えば洗うほど流せば流すほど香が広がる。：
 …二三度、四五度、繰返すうちに、指にも、手にも、果はては指環の
 緑碧りよくへきこうこう 紅黄こうこうの珠玉の数にも、言いようのない悪臭が蒸いれ掛かるよ
 うに思われたので。……

「ええ。」

紫玉はスツと立つて、手のはずみで一振ふり振った。

「ぬしにおなりよ。」

白金プラチナの羽の散る状さまに、ちらちらと映ると、釵は滝壺たきうに真蒼まっさお
 な水に沈しづんで行く。……あわれ、呪のろわれたる仙禽せんきんよ。卿おんみは熱帯
 の鬱林うつりんに放たれずして、山地の碧潭へきたんに滴たされたのである。：

：トこの奇異なる珍客を迎うるか、不可思議の獲ものに競うか、
静しずかなる池もの面に、眠れる魚うおのごとく縦横よこたに横よこたわつた、樹の枝々の
影は、尾鰭おひれを跳ねて、幾千ともなく、一時いちどきに皆揺動いた。

これに悚然ぞつとした状さまに、一度すぼめた袖を、はらはらと翼のご
とく搏たいたのは、紫玉が、可厭いとわしき移香うつりがを払うとともに、高貴
なる鸚鵡おうむを思い切つた、安からぬ胸の波動で、なお且つ翻々はらはらとふ
るいながら、衝つと飛退とびのくように、滝の下行く棧道の橋に退いた。
石の反橋そりばしである。巖いわと石の、いずれにも累かさなれる牡丹ぼたんの花のご
ときを、左右に築き上げた、銘を石橋しやつきようと言う、反橋の石の真ま
中んなかに立つて、吻ほと一息した紫玉は、この時、すらりと、脊も心
も高かつた。

七

明眸めいぼうの左右に樹立こだちが分れて、一條ひとすじの大道、炎天もとの下に展ひらけ
 つつ、日盛ひざかりの町の大路が望まれて、煉瓦造れんがづくりの避雷針、古い白
 壁らかべ、寺の塔など睫まつげを擦こる中に、行交う人は点々と蝙蝠こうもりのごと
 く、電車は光りながら山椒魚さんしょうおの這はうのに似ている。

忘れもしない、限界のその突当りが、昨夜ゆうべまで、我あればこそ、
 電燭でんしよくのさながら水晶宮のごとく輝いた劇場であつた。

ああ、一翳いちえいの雲もないのに、緑紫紅くれなゐの旗の影が、ぱつと空を
 蔽おほうまで、花やかに目に飜さつつた、と見ると颯さつと近づいて、眉に近

い樹々の枝に色鳥の種々いろいろの影に映った。

蓋し劇場に向つて、高く翳かざした手の指環の、玉の矜ほこりの幻影まぼろしである。

紫玉は、瞳を返して、華奢きゃしゃな指を、俯向うつむいて視みつつ莞爾にっこりした。

そして、すらすらと石橋を前方むこうへ渡った。それから、森を通る、姿は翠みどりに青ずむまで、静しずかに落着いて見えたけれど、二ツ三ツ重かさなつた不意の出来事に、心の騒いだのは争われない。……涼傘ひがさを置忘れたもの。……

森を高く抜けると、三国見霽みはらしの一面の広場になる。赫かつと射る日に、手廂てびさししてこう視ながむれば、松、桜、梅いろいろ樹きの状さま、枝

の振ふりの、各自おのおの名ある神仙の形を映すのみ。幸いいに可いまわ忌し坊主の影は、公園の一木一草ぼくをも妨げず。また……人の往來ゆきかうさえほとんどない。

一ひとところ 処、大池があつて、朱塗の船の、漣さざなみに、浮いた汀みぎわに、盛装した妙齡としごろの派手な女が、番つがいの鴛鴦おしどりの宿るように目に留つた。真白な顔が、揃つてこつちを向いたと思うと。

「あら、お嬢様。」

「お師匠さん。」

一人がもう、空氣草履なまめの、媚つまかしい褌まき捌さばきで駆けて来る。目鼻は玉江。……もう一人は玉野であつた。

紫玉は故郷へ歸つた気がした。

「不思議な処で、と言いたいわね。見ぶつかい。」

「ええ、觀光団。」

「何を悪戯いたずらをしているの、お前さんたち。」

と連立つて寄る、汀に居た玉野の手には、船首みよしへ掛けつつ棹さおが

あつた。

ふなばたあい、もえぎ
舷は藍、萌黄の翼で、頭かしらにも尾にも紅べにを塗つた、鷯げきしゅ首の船の

屋形造。玩具おもちゃのようだが四五人は乗れるであろう。

「お嬢様。おめしなさいませんか。」

聞けば、向う岸の、むら萩いおりに庵いおりの見える、船主ふなぬしの料理屋には

もう交渉済で、二人は慰みに、これから漕出こぎだそうとする処だった。

……お前さんに漕げるかい、と覚束おぼつかなさかに念を押すと、浅くて

棹が届くのだから仔細しさいない。ただ、一ヶ所底の知れない深ふか水の穴がある。竜たつの口と称となえて、ここから下の滝の伏樋ふせどいに通ずるよし言伝える、……危くはないけれど、そこだけは除よけたが可よからう、と、……こんな事には気軽な玉江が、つい駆出して仕ことわり誼を言いに行つたのに、料理屋の女中が、わざわざ出て来て注意をした。

「あれ、あすこですわ。」と玉野ゆびさが指す、大池を艮うしとらかたの方へ寄る処に、板を浮かせて、小さな御幣ごへいが立っていた。真中まんなかの築洲つきずに鶴ヶ島というのが見えて、祠ほこらに竜神を祠まつると聞く。……鵜首うしなの船は、その島へ志すのであるから、滝の口は近寄らないで済むのであつたが。

「乗ろうかね。」

と紫玉はもう棲つまを巻くように、爪つま尖さきを揃えながら、

「でも何だか。」

「あら、なぜですえ。」

「御幣まで立って警戒をした処があつちやあ、遠くを離れて漕ぐにしても、船頭が船頭だから気味が悪いもの。」

「いいえ、あの御幣は、そんなおどかしじゃありませんの。不断は何にもないんだそうですけれど、二三日前、誰だか雨乞ひでりだと言つて立てたんだそうですの、この早ひでりですから。」

岸をトンと盪おすと、屋形船は軽く出た。おや、房州で生れたか
 と思うほど、玉野は思ったより巧たくみに棹さおをさす。大池は静しずかである。
 ふなばた
 舷への朱欄干に、指を組んで、頬ほ杖おづえついた、紫玉の胡粉ごふんのような
 肱ひじの下に、萌黄に藍を交えた鳥の翼の揺るるのが、そこにばかり
 美しい波の立つ風情に見えつつ、船はするすると滑なめつて、鶴ヶ島
 をさして滑なめかに浮ういて行く。

さまでの距離はないが、月夜には柳が煙るぐらいな間まで、島へ
 は棹の数百ばかりはあろう。

玉野は上手あじやを遣る。

さす手が五十ばかり進むと、油を敷いたとろりとした静しずかな水も、

棹に搔かれてどこともなしに波紋が起った、そのせいであろう。

あの底知らずの竜の口とか、日射ひざしもそこばかりはものの朦朧もうろうと

して淀よどむあたりに、——微そよとの風もない折から、根なしに浮いた

板ながら真直まっすぐに立っていた白い御幣が、スースーと少しずつ位

置を転かえて、夢のように一寸二寸ずつ動きはじめた。

凝じつと、……視みるに連れて、次第に、緩く、柔かに、落着いて弧

を描きつつ、その円い線の合する処で、またスースーと、一寸二

寸ずつ動出すのが、何となく池を広く大きく押拡げて、船は遠く、

御幣ははるかに、不思議に、段々汀みぎわを隔るのが心細いようで、気

も浮うっかりと、紫玉は、便少たよりない心持こころがした。

「大丈夫かい、あすこは渦を巻いているようだがね。」

欄干に頼杖したまま、紫玉は御幣を凝視^{みつ}めながら言った。

「詰り^{つま}ませんわ、少し渦でも巻かなけりや、余^{あんま}り静で、橋の上を

這っているようですもの、」

とお転婆^{てんば}の玉江が洒落^{しやれ}でもないらしく、

「玉野さん、船をあっちへ遣つてみないか？……」

紫玉が圧^{おさ}えて、

「不可^{いけな}いよ。」

「いいえ、何ともありませんわ。それだし、もしか、船に故障^{たが}があったら、おーいと呼ぶか、手を敲^{たた}けば、すぐに誰か出て来るからって、女中がそう言っていたんですから。」とまた玉江が言う。

成程、島を越した向う岸の萩の根に、一人乗るほどの小船が見える。中洲の島で、納涼すずみながら酒宴をする時、母屋おもやから料理を運ぶ通かよいぶね船である。

玉野さえ興に乗ったらしく、

「お嬢様、船を少し廻しますわ。」

「だって、こんな池で助たすけぶね船でも呼んでみたが可いい、飛んだお

笑い草で末代までの恥辱じやあないか、あれお止よしよ。」

と言うのに、——逆について船がぐいと廻りかけると、ざぶりと波が立った。その響きうきかも知れぬ。小さな御幣の、廻りながら、遠くへ離れて、小さな浮木うきほどになつていたのが、ツウと浮いて、板ぐるみ、グイと傾いて、水の面おもにぴたりとついたと思うと、罔あ

まりよう
竜の頭、かしら えが絵ける鬼火のごときひとすじ一条の脈が、竜の口からむくりと湧わいて、水を一文字に、射て疾とく、船に近づくと齊ひとしく、波はざツと鳴った。

女優の船頭は棹を落した。

あれあれ、その波なみがしら頭がたちまち船底を噛かむかと思れば、傾く船に三人が声を殺した。途端に二三尺あとへ引いて、薄波を一煽あおり、その形に煽るや否や、人の立つごとく、空へ大なる魚おおい うおが飛んだ。

瞬間、島あおやぎの青柳に銀の影が、パツと映さして、魚は紫立うろこつたる鱗うろこを、冴さえた金色こんじきに輝やかしつゝ颯さつと刎はねたのが、翻ひらり然と宙を躍つて、船の中へと落ちた。その時、水がドブンと鳴った。

舳みよしと艫ともへ、二人はアツと飛退とびのいた。紫玉は欄干すかに縋すがつて身を転かわす。

落ちつつ胴まの間で、一ひとはね刎、刎ねると、そのはずみに、船も動いた。——見事な魚である。

「お嬢様！」

「鯉こい、鯉、あら、鯉だ。」

と玉江が夢中で手を敲いた。

この大なる鯉おおいが、尾鰭おひれを曳ひいた、波の引返ひっかえすのが棄てた棹さうを攫さらった。棹はひとりでに底知れずの方へツラツラと流れて行く。

「……太夫様……太夫様。」

偶ふと紫玉は、宵よいやみ闇の森の下したみち道で真ま暗くらな大樹巨木の梢こずえを仰
いだ。……思い掛けず空から呼掛けたように聞えたのである。

「ちよつと燈あかりを、……」

玉野がぶら下げた料理屋の提ちようちん灯を留めさせて、さし交かわす枝
を透かしつつ、——何事と問う玉江に、

「誰だか呼んだように思うんだがねえ。」

と言う……お師匠さんが、樹の上を視みているから、

「まあ、そんな処ところから。」

「そうだねえ。」

紫玉は、はじめて納得したらしく、瞳をそらす時、鬚まげに手を遣やつて、釵に指を触れた。――指を触れた釵は鸚鵡おうむである。

「これが呼んだのかしら。」

と微醉ほろよいの目を花やかに莞爾にっこりすると、

「あら、お嬢様。」

「可厭いやですよ。」

と仰山に二人が怯おびえた。女弟子の驚いたのなぞは構わないが、読者を怯おびしては不可いけない。滝壺へ投沈めた同じ白金プラチナの釵が、その日のうちに再び紫玉の黒髪に戻った仔細しさいを言おう。

池で、船の中へ鯉が飛込むと、弟子たちが手を拍うつ、立騒ぐ声が響いて、最初は女中が小船で来た。……島へ渡した細綱を手繰

って、立ちながら操るのだが、馴なれたもので、あとを二押三押、
 屋形船が来ると、由を聞き、魚うおを視みて、「まあ、」と目を睜みはつた
 きり、慌あわただしく引返した。が、間まもあらせず、今度は印半纏しるしばんてんを
 被きた若いものに船を操とらせて、亭主らしい年配としごろな法体ほつたいしたの
 が漕こぎつけて、「これはこれは太夫様。」亭主も逸いちはや早くそれを
 知しつていて、恭うやうやしく挨拶をした。浴衣の上だけれど、紋の着いた
 薄羽織うひつを引ひかけていたが、さて、「改めて御祝儀を申述べます。
 目の下二尺三貫目は掛かりましょう。」とて、……及び腰に覗のぞいて
 魂消たまげている若衆わかいしゅに目配せで領うなずせて、「かような大魚、しかも
 出世魚と申す鯉魚りぎよの、お船へ飛込みましたというは、類たぐいまれ
 不思議な祥瑞しょうずい。おめでとう存じまする、皆、太夫様の御人徳。

続きましては、手前預りまする池なり、所持の屋形船。烏漕がましゅうござりますが、従つて手前どもも、太夫様の福分、徳分、未曾有の御人気の、はや幾分かおこぼれを頂戴いたしたも同じ儀で、かような心嬉しい事はござりませぬ。なおかくの通りの早魃、市内はもとより近郷隣国、ただ炎の中に悶えまする時、希有の大魚の躍りましたは、甘露、法雨やがて、禽獸草木に到るまでも、雨に蘇生りまする前表かとも存じまする。三宝の利益、四方の大慶。太夫様にお祝儀を申上げ、われらとても心祝いに、この鯉魚を肴に、祝うて一献、心ばかりの粗酒を差上げと存じまする。まず風情はなくとも、あの島影にお船を繋ぎ、涼しく水ものをさしあげて、やがてお席を母屋の方へ移しましょう

。「で、辞退も会釈もさせず、紋着もんつきの法然頭ほうねんあたまは、もう屋形船の方へ腰を据えた。

若衆に取寄せさせた、調度を控えて、島の柳に纏もやった頃は、そのでもない、汀みぎわの人立ひとたちを遮るためと、用意の紫の幕を垂れた。「神慮の鯉魚、等閑なおざりにはいたしますまい。略儀ながら不束ふつつかな田舎料理の庖丁をお目に掛けます。」と、ひたりと直つて真魚まなな箸ばしを構えた。

——釵は鯉の腹を光つて出た。——竜宮へ往来した釵の玉の鸚鵡うむである。

「太夫様——太夫様。」

ものを言おうも知れない。——

とばかりで、二声聞いたように思っただけで、何の氣勢けはいもしない。

風も囁ささやかず、公園の暗夜やみよは寂しかった。

「太夫様。」

「太夫様。」

うつかり釵を、またおさえて、

「可厭いやだ、今度はお前さんたちかい。」

十

——水のすぐれ覚ゆるは、

せいてんじく はくろち
西天竺の白鷺池、

じんじようきよゆうにすみわたる、

こんめいち
昆明池の水の色、

ゆくすえ
行末久しく清むとかや。

「お待ち。」

紫玉は耳を澄すました。道の露芝、曲水の汀にして、さらさらと音

する流ながれの底に、聞きも知らぬ三味線の、沈んだ、陰気な調子に合

せて、微かすかに唄う声がする。

「——坊さんではないかしら……」

紫玉は胸が轟とどろいた。

あの漂泊さすらいの芸人は、鯉魚の神秘を視みた紫玉の身には、もはや、

うみ汁のごとく、唾つば、涎よだれの臭い乞食坊主のみではなかつたのである。

「……あの、三味線は、」

夜陰のこんな場所で、もしや、と思う時、搔かき消きえるように音が留やんで、ひたひたと小石を潜くつて響く水は、忍ぶ登あし音おとのように聞える。

紫玉は立留まつた。

再び、名もきかぬ三味線の音が陰々として響くと、

——日本一にて候ぞと申しける。鎌倉殿ことごとしや、

何処いずこにて舞いいて日本一とは申しけるぞ。梶原申しけるは、
 一歳ひととせ百日ひでりの旱の候いけるに、賀茂川かもがわ、桂川かつらがわ、水瀬みなせ

切れて流れず、筒井の水も絶えて、国土の悩みにて候いけるに、――

聞くものは耳を澄まして袖を合せたのである。

――有^{うげん}驗の高僧貴僧百人、神泉苑の池にて、仁王^{にんのうきよう}経を講じ奉らば、八大竜王も慈現^{じげんのうじゆ}納受たれ給うべし、と申しければ、百人の高僧貴僧^{しやう}を請じ、仁王経を講ぜられしかども、その驗^{しるし}もなかりけり。また或人^{ある}申しけるは、容顔美麗なる白拍子^{しらびやうし}を、百人めして、――

「御坊様。」

今は疑うべき心も失^うせて、御坊様、と呼びつつ、紫玉が暗中を透^{すか}して、声^{かた}する方に、縋^{すが}るように寄ると思うと、

「燈ひを消せ。」

と、蕭さびたが力ある声して言つた。

「提ちようちん灯を……」

「は、」と、返事と息を、はッはッとはずませながら、一度消けしそ損こねて、慌あわただしげに吹消した。玉野の手は震えていた。

——百人の白拍子をして舞わせられしに、九十九人舞いたりしに、その驗しづかもなかりけり。静しづか一人舞いたりとても竜神じげん示現あるべきか。内侍所ないしどころに召されて、禄ろくおもきものにて候にと申したりければ、とても人数ひとかずなれば、ただ舞わせよと仰せ下されければ、静が舞いたりけるに、しんむしようの曲という白拍子を、——

燈を消すと、あたりがかえつて朦朧と、薄く鼠色に仄めく向
 うに、石の反橋そりばしの欄干に、僧形そうぎようの墨の法衣ころも、灰色になつて、
 蹲うずくまるか、と視れば欄干に胡坐あぐら掻いて唄う。

橋は心覚えのある石橋の巖組いわぐみである。気が着けば、あの、か
 くれ滝の音は遠くどうどうと鳴つて、風のごとくに響くが、掠かすれ
 るほどの糸の音ねも乱れず、唇を合すばかりの唄も遮られず、嵐の
 下の虫の声。が、形は著しいものではない、胸をくしやくしやと
 折つて、坊主頭を、がく、と俯向うつむけて唄うので、頸うなじを抽ぬいた軋てんじ
 軋かんに掛かる手つきは、鬼が角を弾はじくと言わば巖いめしい、むしろ黒
 猫が居て顔を洗うというのに適する。

——なから舞いたりしに、御輿みこしの岳たけ、愛宕山あたごやまの方かたより

黒雲にわか^{いでき}に出来て、洛^{らくちゆう}中^{ちゆう}にかかると見えければ、

と唄う。……紫玉は腰を折つて地に低く居て、弟子は、その背^う後^{しろしやが}に蹲^{すん}んだ。

——八大竜王鳴渡りて、稲妻ひらめきしに、諸人目を驚かし、三日の洪水を流し、国土安穩なりければ、さてこそ静の舞に示現ありけるとて、日本一と宣旨^{たまわ}を給りけると、承^うり候。——

時に唄を留^やめて黙った。

「太夫様。」

余り尋常な、ものいいだったが、

「は、」と、呼吸をひいて答えた紫玉の、身動ぎに、帯がキと擦れて鳴つたほど、深く身に響いて聞いたのである。

「癩坊主が、ねだり言を肯うて、千金の釵を棄てられた。その心操に感じて、些細ながら、礼心に密と内証の事を申す。

貴女、雨乞をなさるが可い。——天の時、地の利、人の和、まさ

しく時節じゃ。——ここの大池の中洲の島に、かりの法壇を設けて、雨を祈ると触れてな。……袴、練衣、烏帽子、狩衣、白

拍子の姿が可からう。

衆人めぐり見る中へ、その姿をあ

柳の上へ高く顕し、大空へ向つて拝をされい。祭文にも歌にも

及ばぬ。天竜、雲を遣り、雷を放ち、雨を漲らすは、明午を過ぎ

て申の上刻に分豪も相違ない。国境の山、赤く、黄に、峰岳

を重ねて爛れた奥に、白蓮の花、玉の掌ほどに白く聳えたのは、
 四時に雪を頂いて幾万年の白山じゃ。貴女、時を計つて、その
 鸚鵡の釵を抜いて、山の其方に向つて翳すを合図に、雲は竜のご
 とく湧いて出よう。——なおその上に、可いか、名を挙げられい。
 ……」

——賢人の釣を垂れしは、
 嚴陵瀬の河の水。

月影ながらもる夏は、
 山田の笕の水とかや。——…

翌日の午後の公園は、炎天の下に雲よりは早く黒くなつて人が湧いた。煉瓦を羽蟻れんがはありで包んだような凄じい群集すさまである。

かりに、鎌倉殿としておこう。この……県に成上なりあがりの豪族、

色好みの男爵で、面構つらがまえも風采も巨頭公あたまでつかちによう似たのが、

劇興行しほいのはじめから他に手を貸さないで紫玉を鼯鼠ひいきした、既に昨夜うべもある処で一所になる約束があつた。その間の時間まを、紫玉は

微行したのである。が、思いも掛けない出来事のために、大分の隙入ひまいりをしたものの、船に飛んだ鯉は、そのよしを言づけて初穂

というのを、氷詰めにして、紫玉から鎌倉殿へ使つかいを走らせたほどなのであつた。――

車の通ずる処までは、もう自動車が来て待つていて、やがて、相会すると、ある時間までは附添つて差支えない女弟子の口から、
真先^{まつさき}に予言者の不思議が漏れた。

一議に及ばぬ。

その夜^よのうちに、池の島^{あじろ}へ足代を組んで、朝は早や法壇が調つた。無論、略式である。

県社の神官に、故実の詳しいのがあつて、神燈を調べ、供饌^{ぐせん}を捧げた。

島には鎌倉殿の定^{じようもん}紋^{もん}ついた帷幕^{まんまく}を引^ひ繞^{めく}らして、威儀を正した夥多^{あまた}の神官が詰めた。紫玉は、さきほどからここに控えたのである。

あの、底知れずの水に浮いた御幣は、やがて壇に登るべき立たて女形やまに対して目触りめざわだ、と逸早く取退けとりのさせ、樹立こだちさしいでて蔭ある水に、例の鵜首げきしゅの船を泛うかべて、半ば紫の幕を絞った裡うちには、鎌倉殿をはじめ、客分として、県の頭官、勲位の人々が、杯を置いて籠こもった。——雨乞に参ずるのに、杯をめぐらすという故実は聞かぬが、しかし事実である。

伶人れいじんの奏楽一順して、ヒュウと簫しょうの音ねの虚空に響く時、柳の葉にちらちらと緋ひの袴はかまがかかった。

群集は波を揉もんで動揺なだれを打った。

あれに真白まっしろな足が、と疑う、緋の袴は一段、階きざに劃はしられて、
 一一ふたすじ条の紅べにの霞を曳ひきつつ、上紫に下萌黄もえぎなる、蝶鳥ぬいの刺繡いの狩か

りぎぬ

衣は、緑に透き、葉に靡なびいて、柳の中を、するすると、容顔美麗なる白拍子。紫玉は、色ある月の風情して、一千の花の燈ともしの影、百を数うる雪の供饌に向うて法壇の正面にすらりと立つ。

ななめ

花火の中から、天女が斜ななめに流れて出ても、群集はこの時くらい驚異の念は起すまい。

烏帽子もともにこの装束は、織ものの模範、美術の表ひようほん品、

源平時代の参考として、かつて博覧会にも飾られた、鎌倉殿が秘蔵の、いずれ什じゅうもつ物であつた。

さて、遺憾ながら、この晴の舞台において、紫玉のために記すべき振事ふりごとは更ふりごとにない。渠かれは学校出の女優である。

が、姿は天より天降あまくだった妙たえに艶えんなる乙女のごとく、国を囲め

る、その赤く黄に爛ただれたる峰岳みねだけを貫かいて、高く柳の間に懸かつた。

紫玉は恭うやうやしく三たび虚空なかくぞらを拝した。

時に、宮奴みややつこの装よそおいした白丁はくちようの下男が一人、露店の飴屋あめやが

張りそうな、洪おほの大傘おおからかさを畳んで肩にかついだのが、法壇の根

に顕あらわれた。——これは怪けしからず、天津乙女の威厳と、場面の神

聖そこなを害そこなつて、どうやら華魁おいらんの道中じみたし、雨乞にはちと行過

ぎたもののようだった。が、何、降るものと極きまれば、雨具の用意

をするのは賢い。……加うるに、紫玉が被かいだ装束は、貴重なる

宝物ほうもつであるから、驚破すわと言わばさし掛けて濡らすまいための、

鎌倉殿の内意であつた。

——さればこそ、このくらい、注意の役に立ったのはあるまい。

あわれ、身のおき処がなくなつて、紫玉の裾が法壇に崩れた時、
「状ざまを見ろ。」「や、身を投げろ。」「飛込め。」——わツと群
集の騒いだ時、……堪たまらぬ、と飛上つて、紫玉を圧おさえて、生命いのちを
取留めたのもこの下男で、同時に狩衣を剥はぎ、緋の袴の紐を引ひきひ
解どいたのも——鎌倉殿のためには敏びん捷しやうな、忠義な奴やつで——
この下男である。

雨はもとより、風どころか、余あまりの人出に、大池には蜻蛉とんぼも飛ば
なかつた。

時を見、程を計つて、紫玉は始め、実は法壇に立つて、数万の群集を足許あしもとに低き波のごとく見下しつゝ、昨日通つた坂にさえ蟻の伝うに似て押覆おしかえす人数を望みつゝ、徐に雪の頤あぎとに結んだ紫の纓ひもを解いて、結目むすびめを胸に、烏帽子を背に掛けた。

それから伯爵の釵を抜いて、意気込んで一振り振ると、……黒髪さつの颯さばと捌けたのが烏帽子の金に裏透いて、さながら金屏風きんびょうぶに名誉ながの絵師の、松風を墨で流したようで、雲も竜もそこから湧くか、と視みめられた。——これだけは工夫した女優の所作で、手には白金プラチナがあいくち首のごとく輝いて、凄艶せいえん比類なき風情であつた。さてその鸚鵡おうむを空に翳かざした。

紫玉の睜^{みは}った瞳^めには、確^{たしか}に天際^{へきへん}の僻^{へき}辺^{へん}に、美女の掌^てに似た、
白山は、白く清く映つたのである。

毛筋ほどの雲も見えぬ。

雨乞の雨は、いずれも後刻の事にして、そのまま壇^{くだ}を降^{くだ}つたら
ば無事だつたろう。ところが、遠雷の音でも聞かすか、暗転にな
らなければ、舞台に馴^なれた女優だけに幕が切れない。紫玉は、し
かし、目前^{まのあたりぎよ}鯉魚の神異を見た、怪しき僧の暗示と識^{しんげん}言^{げん}を信じた
のであるから、今にも一片の雲は法衣の袖のように白山の眉に翻
るであろうと信じて、しばしを待つ間^まを、法壇を二廻り三廻り緋
の袴^{あは}して輪^あに歩行^{ある}いた。が、これは鎮守の神巫^{みこ}に似て、しかもな
んば、という足どりで、少なからず威厳を損じた。

群集の思わんほどはばかも憚られて、腋わきの下に衝と冷き汗を覚えたのこそ、天人の五衰ごすいのはじめとも言おう。

氣をかえて屹ぎつとなつて、もの忘れした後こうけん見はげに烈しくきつかけを渡す状さまに、紫玉は虚空に向つて伯爵の鸚鵡を投げた。が、あの玩おもちゃ具の竹蜻蛉のように、晃々きらきらと高く舞つた。

「大神樂だいかぐら！」

と喚わめいたのが第一番の半畳で。

一人口火を切つたから堪らない。練馬大根と言う、おかめと喚く。雲の内侍ないじと呼ぶ、雨しよぼを踊れ、と怒鳴る。水の輪の拡がり、嵐の狂うごとく、聞きくも堪えない讒ざん謗ぼう罵う詈ばりは雷いかずちのごとく哄どつと沸く。

鎌倉殿は、船中において嚇怒した。愛寵せる女優のために

群集の無礼を憤ったのかと思うと、——そうではない。この、好色の豪族は、疾く雨乞の驗なしと見て取ると、日の昨の、短夜もはや半ばなりし紗の蚊帳の裡を想い出した。……

雨乞のためとて、精進潔斎させられたのであるから。

「漕げ。」

紫幕の船は、矢を射るように島へ走る。

一度、駆下りようとした紫玉の緋裳は、この船の激しく襲つたために、一度引留められたものである。

「……………」

と喚く鎌倉殿の、何やら太い声に、最初、白丁に豆烏帽子

で傘を担いだ宮奴は、島のなる幕の下を這つて、ヌイと面を出した。

すぐに此奴が法壇へ飛上つた、その疾さ。

紫玉がもはや、と思ひ切つて池に飛ぼうとする処を、
そして剥いだ。

女の身としてあらりようか。

あの、雪を束ねた白いものの、壇の上にひれ伏した、あわれな
状は、月を祭る供物に似て、非ず、
早魃の鬼一口の犠牲である。
ヒイと声を揚げて弟子が二人、幕の内で、手放しにわつと泣いた。

赤ら顔の大入道の、首抜きの浴衣の尻を、七のずまで引めくつ

たのが、苦り切つたる顔して、つかつかと、階を踏んで上つた、
金^{きんかた}方か何ぞであらう、芝居もので。

肩をむずと取ると、

「何だ、状^{さま}は。小町や静^{しずか}じやあるめえし、増長しやがるからだ。」

手の裏かえす無情さは、足も手もぐたりとした、烈日に裂けか
かる氷のような練^{ねりぎぬ}絹の、紫玉のふくよかな胸を、酒^{さか}焼^{やけ}の胸に
引^{ひつつか}摺^{けずね}み、毛脛に挟んで、

「立たねえかい。」

「口惜しい！」

紫玉は舷ふなばたに縋すがつて身を震わす。——真夜中の月の大池に、影の

沈める樹の中に、しばめる睡蓮すいれんのごとく濛ただよいつつ。

「口惜しいねえ。」

車馬の通行を留めた場所とて、人目の恥あやに歩行みもならず、――

――金方きんかたの計はかりらいで、――万松亭ばんしょうていという汀みぎわなる料理店に、と

にかく引籠ひっこもる事にした。紫玉はただ引被ひっかついで打伏した。が、

金方は油断せず。弟子たちにも旨を含めた。で、次場所の興行か

くては面白かるまいと、やけ酒を煽あおっていたが、酔倒れて、それ

は寝た。

料理店の、あの亭主は、心優やさしいもので、起居たちいにいたわりつ、慰

めつ、で、これも注意はしたらしいが、深更のしかも夏の夜の戸鎖浅ければ、伊達巻の跣足で忍んで出る隙は多かつた。

生命の惜からぬ身には、操るまでの造作も要らぬ。小さな通船は、胸の悩みに、身もだえするままに揺動いて、萎れつつ、

乱れつつ、根を絶えた小船の花の面影は、昼の空とは世をかえて、皓々として雫する月の露吸う力もない。

「ええ、口惜しい。」

乱れがみをりつつ、手で、碎けよ、とハタと舷を打つと……時の間に痩せた指は細くなつて、右の手の四つの指環は明星に擬えた金剛石のをはじめ、紅玉も、緑宝玉も、スルリと抜けて、きらきらと、薄紅に、浅緑に皆水に落ちた。

どうでもなれ、左を試みに振ると、青玉も黄玉も、真珠もともに、月の美しい影を輪にして沈む、……竜たつの口は、水の輪に舞う処である。

ここに残るは、名なればそれを誇ほこりとして、指にも髪にも飾らなかつた、紫の玉ただ一つ。——紫玉は、中高な顔に、深く月影に透かして差覗さしのぞいて、千尋ちひろの淵ふちの水底みなそこに、いま落ちた玉の緑に似た、門と柱と、欄干と、あれ、森こずえの梢しらさぎの白鷺の影さえ宿る、櫓やぐらと、窓と、楼たかどのと、美しい住家すみかを視た。

「ぬしにもなつて、この、この田舎のものども。」

縫る波に力あり、しかと引いて水を掴つかんで、池さかさまに倒に身を投じた。爪尖つまさきの沈むのが、釵おうむの鸚鵡おうむの白く羽うつがごとく、月光に

微^{かすか}に光った。

「御坊様、貴方は？」

「ああ、山国の門附^{かどづけ}芸人、誇れば、魔法つかいと言いたいが、いかな、さまでの事もない。昨日^{きのう}から御目に掛けた、あれは手品じゃ。」

坊主は、欄干に擬^{まが}う苔蒸^{こけむ}した井桁^{いげた}に、破法衣^{やれごろも}の腰を掛けて、活^いけるがごとく爛々^{まなこ}として眼の輝く青銅の竜の蟠^{わだかま}れる、角^{つの}の枝に、肱^{ひじ}を安らかに笑みつつ言つた。

「私に、何のお怨^{うら}みで？……」

と息せくと、眇^{めづ}の、ふやけた目珠^{めだま}ぐるみ、片頬^{たなそこ}を掌でさし蔽^{おお}う

て、

「いや、辺境のものは気が狭い。貴方が余り目覚しい人気ゆえに、恥入るか、もの嫉^{ねた}みをして、前芸をちよつと遣^やつた。……さて時に承^あるが太夫、貴女^{あなた}はそれだけの御身分、それだけの芸の力で、人が雨乞^{あまがひ}をせよ、と言^いわば、すぐに優^{やさ}伎^{おぎ}の舞台に出^でて、小町も静も勤めるのかな。」

紫玉は巖^いに俯^{うつ}向^むいた。

「それで通るか、いや、さて、都は気が広い。——われらの手品はどうじやろう。」

「ええ、」

と仰^{おほ}いで顔を視^みた時、紫玉はゾツと身に沁^しみた、腐れた坊主に

不思議な恋を知ったのである。

「貴方なら、貴方なら——なぜ、さすろうておいで遊ばす。」

坊主は両手で顔をおさ压えた。

「面目ない、われら、ここに、高い貴い処に恋人がおわしてな、雲霧を隔てても、その御足許おあしもとは動かれぬ。や！」

と、慌あわしく身を退しると、呆あきれ顔してハツと手を拵きげて立つた。

髪黒く、色雪のごとく、厳いつくしく正えんしく艶えんに気高き貴女きじよの、繕きわ

ぬ姿つししたのが、すらりと入った。月を頸うなじに掛けつと見えたは、真ま

白ひがな涼傘であつた。

膝と胸を立てた紫玉を、ちらりと御覧てよずると、白やかなる手尖てよきを軽く、彼が肩に置いて、

「私を打つたね。——雨と水の世話をしに出ていた時、……」
 よそおい
 装は違った、が、幻の目にも、面影は、浦安の宮、石の手水
 鉢ばちの稚児に、寸分のかわりはない。

「姫様、貴女あなたは。」

と坊主が言った。

「白山へ帰る。」

ああ、その剣ヶ峰の雪の池には、竜女の姫神おわします。

「お馬。」

と坊主が呼ぶと、スツと畳んで、貴女きじよが地に落した涼傘は、身み
 震ふるいをしてむくと起きた。手まさぐりたまえる緋ふの総ふさは、たちま

くれない
ち紅の手綱に捌さけて、朱の鞍くら置いた白の神馬しんめ。

ずっと騎めすのを、轡くつわづな頭ひを曳ひいて、トトトト——と坊主が出

たが、

「纏しゅうぎ頭づをするぞ。それ、錦にしきを着ゆて行け。」

かなぐり脱ころもいだ法衣ころもを投げると、素裸はだかの坊主が、馬に、ひたと

添こんい、紺碧こんぺきなる巖いわの聳おそつ崖がけを、翡翠ひすいの階はしご子こを乗のるようきじよに、貴女

は馬上うまの上にひらりと飛とぶと、天か、地か、渺びようぼう茫ぼうたる広野ひろのの中を

タタタタと蹄ひづめの音響ひびき。

蹄みなぎを流ながれて雲が漲みなぎる。……

身を投じた紫玉の助かっていたのは、靈れい沢いたく金水こんすいの、巖窟がんくつの

奥である。うしろは五十万坪とと称なうる練兵場。

紫玉が、ただ沈んだ水底みなそこと思ったのは、天地を静めて、車軸を流す豪雨であつた。――

雨を得た市民が、白身に破法衣やれごろもした女優の芸の徳に対する新
たなる渴仰かつごうの光景ようすが見せたい。

大正九（一九二〇）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伯爵の釵

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>